

会津ウルシ 次世代へ

サントリー地域文化賞受賞 はるなか

植栽 ↓ 樹液採取 ↓ 製品化

「循環」実現目指す

第四十四回サントリー地域文化賞に選ばれた認定NPO法人はるなかは、「桜の名所、漆の里」会津」を合言葉に、長年にわたる植栽を続けてきた。このうちウルシは、樹液を採取して製品化し、収益で木を育てるという「循環」をつくることも、地元伝統産業である会津漆器の技術「継承」を目指している。地元の風土と伝統に根付いた取り組みは、全国の地域づくり活動のモデルになると期待される。

はるなかは二〇〇四(平成十六)年に発足した。会津藩の財政再建を行い、漆器や酒造りなどの産業を振興した名家老田中文幸(はるなか)にならって地域の活性化を図ろうと呼びかけた。二〇〇五年にNPO法人化した。現在、「桜」「漆」「木綿・藍」「自然環境」「地域活性化」の五つの部会があり、二十代から八十代の約百三十人が活動している。



酒器の製作に向け、形で味や香りがどう変わるか確かめる若手職人ら＝昨年8月

使った酒器プロシエクトがスタート。部会のメンバーである三十代以下の若手職人ら約十人が中心となって五種類を製作した。今春、会津などの地酒とセットで販売され、好評を博した。会津産ウルシ液は外国産に比べ、液の伸びが格段に良いという。地元職人からは、新たな技法の開発も可能で、漆芸の表現の幅が広がる期待されている。

発・販売を目指しており、すでに動き出したところ。ノウハウを若手につないでいく場にした」との目標を語った。

七百五十本もの桜を植えたことや、田中文幸に光を当てるなど、会津ならではの活動であること、高く評価された」と語った。

県庁で開かれた記者会見で、理事長の佐藤光信さんは、会津若松市の会津漆器技術後継者訓練校を念頭に「技術を習得した若者が今後も会津に残って頑張っているようにサポートしたい」と力を込めた。会見に同席したサントリー文化財団主任研究員の大栗佳奈さんは「ゼロから始めただけでなく、ウルシ四十種



「会津を元気に」

はるなかの佐藤光信理事長は三十日、推薦した福島民報社の芳見弘一社長に受賞を報告した。「今後もさまざまな活動を継続し、少しでも会津が元気になれば」と語った。吉田徹副理事長、サントリー文化財団の大栗佳奈主任研究員、サントリーホールディングスの加藤慎二郎広報部長、サントリーの富田秀雄福島支店長が同席した。

は八月の公

猛烈台風 大東島 最大瞬間風速は七

ヤフオク 絶滅危惧種の出品禁止